

## 題 相模湾試験場に配属されて ― 業務中に感じたこと

水産技術センター相模湾試験場 主任研究員 加藤充宏

皆さんこんにちは。今年の6月から相模湾試験場に配属されました加藤と申します。相模湾試験場には、今から10年近く前にも水産業普及指導員としていたこともありましたが、今度は主任研究員としての配属です。

今回のコラムでは、私が現在担当しているいくつかの業務の内容と、それぞれの作業中に感じたことについてお話ししたいと思います。

### 【その1：海環境調査】

相模湾試験場では、県土木事務所が行う養浜工事（砂を他の場所から持ってくるなどして砂浜が痩せないようにする工事）や河川の増水等が海中の環境に与える影響を調べるため、調査船「ほうじょう」を使って定期的に環境調査を行っています。調査では、水温、塩分や透明度、水色といった水質に関する項目を測定するほか、海底の底質や底生生物を調べるため採泥器を用いて泥を採取したりするのですが、数多くの調査点を順に巡ってそれを行うのはあわただしくなかなか骨の折れる作業です。しかし当試験場ではそれを見事なチームワークでこなしています。例えばある調査点に到着すると、Aさんは多項目水質計で観測を開始、Bさんは透明度板で透明度を測定します。次にCさんが船のウィンチを操作して採泥器を下ろし、DさんとEさんがそれを補助します（図1）。そして採泥器が上がってくると、DさんEさんが泥を取り出し、Gさんと透明度の測定を終えたBさんが採れた泥から底生生物をより分け（図2）、一方で水質計のデータをパソコンに移し終えたAさんが今度は底質分析のサンプルを採取・・・という感じで流れるように作業が進みます（ちょっと想像しにくいかもしれませんが、ごめんなさい）。はじめて調査に加わったときは、みんながテキパキと作業を進める様子に少し感動してしまいました。当試験場は職員の数が決して多いとはいえないのですが、そのぶんみんなが力を合わせて業務に取り組む気質が強いと感じた一幕でした。

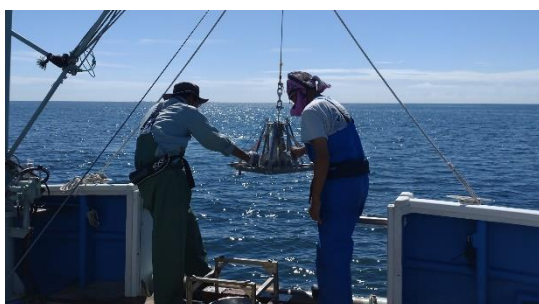


図1 採泥器を支えるDさんとEさん



図2 底生生物をより分けるBさんとGさん

## 【その2：観測ブイの清掃】

小田原市の江之浦漁港近くの洋上に、当試験場が設置した潮流や水温を観測するためのブイが浮かんでいます（図3）。観測データはインターネット上で公開しており（江之浦水温・流向流速データ速報 <http://www.leafsystem.co.jp/sagami/enoura/hp/>）、定置網等の漁業者はそのデータを見て日々の操業の参考にしています。現在のブイは今から2年前に設置された4代目ですが、このブイの日常管理も当試験場の大事な仕事です。ブイは年中無休で海に浮かんでいるため、本体やロープにフジツボやカキなどの様々な付着生物が付着してしまいます。特に最下部のセンサーはきれいな状態を保つ必要があるため、だいたい2週間に一度のペースで当試験場の船外機船「はやかわ」でブイの清掃を行うのですが、これまたかなり骨の折れる作業です。作業自体は船上でブイについた付着生物をこそげ落とす、という単純なものなのですが、暑い夏に日光を遮るものもない船上でスクレイパーを握り、フジツボをガシガシ落としていると、すぐに汗だくになってしまいます（図4）。最初の頃は私も「2週間くらいでフジツボが付いたりするの？もっと回数減らしてもいいのでは？」と思っていたのですが、実際に作業を行ってみると、それはとんでもない思い違いでした。他の業務や天候の関係でひと月近く清掃できなかつた事があったのですが、ブイ全体が成長したフジツボに覆われ、いつも以上に時間がかかりました（終わった頃にはみんなぐったり・・・）。この作業は地味だし汚れるし積極的にアピールできるものでもないのですが、県民の皆さんに正確な海況情報を発信するためには必要不可欠な仕事です。この作業をしていると、いつも「嗚呼、これぞ地方水試の仕事・・・」という気持ちになります（個人の感想です）。



図3 江之浦沖に設置された観測ブイ



図4 観測ブイを掃除する私

そのほかの業務については、また次の機会にでもお話しします。